あったかいがいいね

シャローム横浜通信 8月号

いのちに向き合う

梅雨が早々に明け、夏の暑さが本格化しておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

先日、『フロントライン』という映画を見る機会がありました。新型コロナが国内に広がる前、横浜港に寄港したダイヤモンド・プリンセス号で起こった壮絶な出来事を描いた作品です。

その5年後の2025年2月3日、読売新聞に「廊下すら危険だった」…ダイヤモンド・プリンセス集団感染5年、乗船の医師「専門家の早期派遣が重要」という記事が掲載されていました。それを読み、あらためて当時の状況が思い出されました。

当時、災害時感染制御支援チームの一員として乗船した桜井滋医師は、船が寄港してから8日後に乗船した時点で、すでに乗客・乗員135名に感染が広がっていたと振り返っています。

その状況下で、桜井医師らは食堂の椅子を間引き、会話を控えるよう助言し、防護具の正しい着脱方法を指導するビデオを外国人船員向けに英語字幕付きで作成するなどの工夫がなされました。医療物資や人手が足りない中、目の前の「いのち」を守るために、できる限りの対応を続けていたのです。

それでも最終的には、乗員・乗客3711名中712名が感染し、13名が亡くなりました。この経験を通じて桜井医師は「早期の感染制御介入の重要性」を強く訴え、現在は国の予算で災害時感染制御支援チームが活動できる体制整備へとつながったとのことです。

私は映画やこの記事を通じて、いのちの現場で尽力する人たちの姿勢に深く心を打たれました。そして同時に、シャローム横浜で日々ご利用者に向き合う職員の姿を重ねて見ていました。感染への恐れや不安が続く中でも、目の前の「いのち」に真摯に向き合い、支える手を止めずに努力を続けていく。この姿勢は法人理念である「いのちを敬い いのちを愛し いのちに仕える」の実践に他なりません。

これからも、一人ひとりのいのちに誠実に向き合いながら歩んでまいりたいと思います。

暑い日が続きますので、皆様の健康が守られますよう、心よりお祈り申し上げます。

施設長　髙原 信夫

梅ジュースとはちみつでおやつ時間

ひまわりでは季節を通じて敷地内の様々な実りをおやつの時間に頂いています。今月は梅の収穫を皆さんと行い、梅ジュースを作りました。そして、パンケーキを焼いた際には、シャロームで採れた貴重なはちみつをかけて頂きました。

こうした実りを通じて各部署の方々とも交流が生まれ、ご利用者との間にも「次の実りは何だろう？」という楽しみにもつながっており、感謝の気持ちでいっぱいです

ひまわり　金子 智美

第 300 号
令和7年7月 15 日発行
（毎月1回 15 日発行）

責任者:施設長 髙原信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町 1988
社会福祉法人
アドベンチスト福祉会
シャローム横浜
☎045-922-7333

編集委員
荒金・石川・石橋

https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/

ご本人にもご家族にも、ほっとする場所に

ショートステイは介護棟４床と一般棟６床で運営しています。
季節を感じられる制作やレクリエーション、そして「ここのご飯が美味しい」と言っていただける食事など、短い時間でも楽しんで過ごせる工夫をしています。
ご利用者の笑顔とご家族の安心、どちらも支えられる場所でありたいと思っています。

ショートステイ担当　原田明子　山本朋子

夏　野　菜　を　食　べ　よ　う　会

栄養課では、７月の行事食として「夏野菜を食べよう会」を開催しました。
茨城産のトウモロコシ、群馬産枝豆をお出ししました。
トウモロコシは甘みがあり、とてもおいしく、入居者の皆様もとても喜んで召し上がっていました。

８月の行事食は「あんみつ屋台」となっておりますので、皆様ぜひ楽しみにして下さい。

栄養課課長　小寺 秀偉

ヨ ブ 記 に 見 る 聖 書 の 信 仰 と は ？

第 208 回　チャプレン　上前 至

旧約聖書学者の故・浅野順一はヨブ記注解の中でヨブ記の最大のテーマは「善人が苦難を受けるのは何故か」であると言う。悪人が苦難を受けるのは当然のことだが、善人の方がより多く苦難を受けるように見えるのは何故なのか、という事である。浅野順一は続けて言う。「ヨブ記を通してみる聖書の信仰は、私達が苦難に会わないように祈ることは当然であるが、時に神はその苦難に会うことを許され、その苦難を通して貴方は何を見ることができるかを試みられるというのである。それは例えば私共が病気にある時、その病気が癒されるように祈る事は当然としても、時に神はその与えられた病気を通して何を見ることができるかという事に重点を置いていると言うのである。

そして人は皆、人にはわからない穴のようなものをもっている。その穴は大きいものもあれば小さいものもある。人によってその大きさは種々あるが、聖書の信仰はその穴を塞ぐことよりも、その穴を通して貴方は何を見ることができるかのほうに重点を置いているというのである。

ヨブは、命を除いて、この世の全てを失ったとき、次のように告白した。「私は裸で母の胎を出た。又、裸でかしこに帰ろう。主が与え主が取られたのだ。主の御名はほむべきかな」（ヨブ記 1 章 21 節）と。ヨブほど、この世で苦難を受けた人はいないだろう。が、彼ほど神に近づき神にある深い信仰を持った人はいないのではないか。そうしたヨブの信仰に私共もあやかりたいものである。